電卓戦争

部門内での企業間競争による
労働生産性の上昇

クレジット

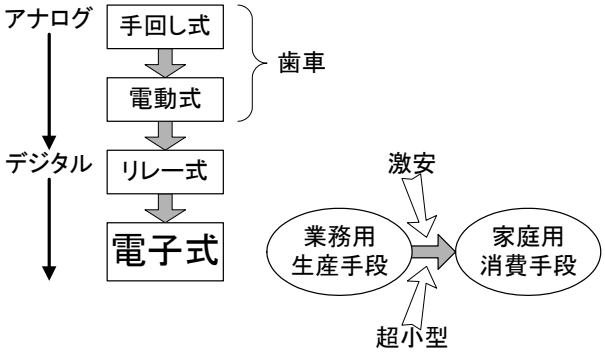
『電子立国日本の自叙伝』,
「第3巻　電卓戦争」
（NHKソフトウェア）

- 本も出ています。――『電子立国日本の自叙伝』，全7巻，相田洋著，NHK出版（NHKライブラリー）

注目点

- ➲ 品質競争と価格競争
- ➲ 生産手段のイノベーションと消費手段のイノベーション
- ➲ 競争と独占

電卓の歴史



主要な参入企業

電卓市場

- Sharp（早川電機工業）
- カシオ計算機（樫尾製作所）

――以上の二社が最後まで残り，寡占を形成

- ビジコン（日本計算機）
  - 画期的な商品をいくつも開発したが，あえなく倒産
- その他有象無象

半導体市場

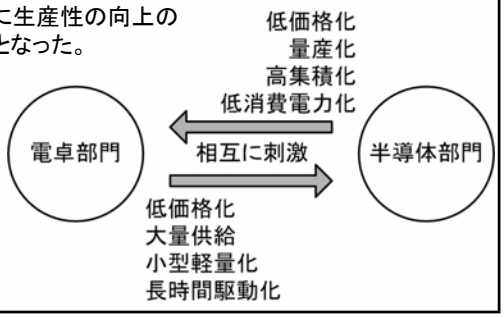
- TI
- Rockwell
- Intel

――以上，最初はアメリカ

- やがて，多数の日本の電機メーカが参入

技術革新

電卓（＝完成品）部門と，
半導体チップ（＝原料）部門とが，
たがいに生産性の向上の
呼び水となった。



最初に目に付くのは品質の向上

- ボディ
  - 軽量化
  - 薄型化
- 性能
  - 高速化
  - 大容量化
  - 長時間駆動化

結局は市場価値の低下

- 最初は品質向上と手をつないで
- やがて品質向上が頭打ちになると，決定的要因に

- 1964年：535,000円
  - CS10A（Sharp）
- 1969年：98,000円
  - QT–8D（Sharp）
- 1972年：12,800円
  - カシオミニ（カシオ）
- いまや100円ショップ

部門内競争の帰結

安くなりすぎ

↓

大規模生産できる大企業以外は採算割れ

↓

多くの企業の撤退

↓

少数の大企業による寡占形成